

震災復興と芸術と宗教

夜9時を過ぎて盛岡駅に降り立つと、秋の冷気に身が引き締まりました。そして駅前に「ジョバンニ」と書かれた看板を見つけると、心が沸き立ちました。今年の全国都市問題会議は、去る10月11日と12日の2日間、宮沢賢治が中学、高校時代を過ごした岩手県盛岡市で開催されました。

東日本大震災の被災地でもある盛岡において、「都市の連携と新しい公共—東日本大震災で見た『絆』の可能性—」と題して、災害対応において自治体が直面した課題などについて、議論を深めようというのが会議の趣旨でした。その中で一般報告をされたお二人の話が示唆深く、印象に残っています。大阪大学教授で演劇家の平田オリザさんと平泉文化遺産センター館長の矢野邦宣さんです。

平田オリザさんは、被災地の復興に必要な巨大な財政支出は、市民の自己判断能力を失わせ、地域の持続的な自立を妨げる可能性があることも否めない、と言います。そしてその「復興のジレンマ」を克服する「文化による社会包摂」の重要性を説かれていました。そして「東北、被災地が真の自立を目指すならば、そこに暮らす民草の一人ひとりが芸術家となって感性を磨き、地域の付加価値を高めていく以外に近道はない。」と言いつけられました。

矢野邦宣さんは、東日本大震災の3か月半後の6月29日にユネスコの世界遺産に登録された平泉の価値について分かりやすく説明してくれました。金色堂の光で満たし尽くされることにより遺体を保存し、弥勒菩薩みろくぼさつが下生する56億7千万年後にこの世に復活して「みちのく」を平和な「この世の浄土」にしたい、という藤原清衡きよひらの思いが現代まで受け継がれているところに平泉の最大の価値がある、と話されました。「絆」とは関心を持ち続けること、それが三陸の「復光」につながる、というまとめは特に感銘を受けました。

平田オリザさんが講演の中で引用した宮沢賢治の「農民芸術概論綱要」の一節にこうあります。

「曾つてわれらの師父たちは乏しいながら可成楽しく生きてゐた

そこには芸術も宗教もあった」

震災復興にも、芸術や宗教による支えが求められています。